

## 〔研究ノート〕 複合文化社会・ハワイの日本語テレビ

—テレビ雑誌『Kokiku』に着目して—

松永智子

### 一 地域文化としての日本語テレビ

一九九三年に、史上初めての外国人横綱として注目を浴びたハワイ出身の元力士・曙太郎（一九六九年生まれ。一九九六年に日本に帰化。旧名チャド・ジョージ・ハオ・ローウエン）は、一九八八年の来日以前、故郷で日本語テレビに親しんでいたことを語っている。<sup>①</sup> 大学生でバスケットボール選手から力士に転身したチャド青年にとつて、相撲との出逢いは少年時代に観たテレビ中継に遡るといふ。ハワイ・オアフ島近郊の島に生まれた曙には、アイルランド、キューバ、ハワイの血が流れている。とりわけ日系コミュニティとの関

わりが深い家庭環境ではなかったが、日本語テレビとの接触はチャド少年の日常だったのである。一九七〇から八〇年代のハワイには、他のエスニック・グループにも共有された日本語テレビ文化圏が存在していたといえよう。ハワイの地域文化としての日本語テレビとは、どのようなものだったのだろうか。

本稿は、米国ハワイ州ホノルルで刊行されていた月刊テレビ雑誌『Kokiku』（一九七五—二〇一一）に着目し、日英二ヶ国語表記のローカル誌が、複合文化社会・ハワイにおける日本語テレビの発展に与えた影響について考察する。『Kokiku』は、ハワイの日本語放送局 KKHU（一九六七—一九八二）のスタッフで漫画家の藤

井日出男（ペンネーム…画夢）と、毎日新聞英文部記者出身の鈴木瑞枝（洗礼名…セシリア）夫妻によって営まれ、オアフ島内外で絶大な人気を博した。<sup>②</sup> 藤井も鈴木も、戦後にハワイに渡った新しい移住者である。印刷を老舗の日本語新聞社、ハワイ報知（一九二一）に委託していたこともあり、一九九五年に藤井が没した後、『Kokiku』は同社に売却され、二〇一一年まで続刊された。ただし、雑誌の特性は編集者の個性に依るため、本稿では、藤井・鈴木夫妻が編集にあたっていた一九七五年から一九九五年までを考察対象とする。

ハワイの日本語メディアに関する先行研究は、日本語新聞を扱ったジャーナリズム研究<sup>③</sup>および移民研究<sup>④</sup>、ラジオや映画、テレビに言及した移民芸能史研究<sup>⑤</sup>、アメリカの放送政策研究<sup>⑥</sup>、そして海外放送事業の当事者である日本放送協会（NHK）の実態調査<sup>⑦</sup>に分けられる。概して蓄積の厚い新聞研究に対し、ラジオ、テレビの放送が十分に検討されているとは言いがたい。発展途上である、ハワイ日本語放送史にアプローチする意義

は小さくないだろう。

一方で、多様なエスニシティが接触し文化の複合化が進むハワイにおける、日系文化のローカル化は、これまで多くの社会学、人類学研究で詳らかにされてきた。<sup>⑧</sup> メディアについても、ホスト社会に同化した二世・三世が運営する日系英語メディアや、ハワイの主流新聞におけるエスニシティ表象を扱った白水繁彦の一連の研究がある。<sup>⑨</sup> ただし、いずれも主たる考察対象は新聞に限定されている。後の力士・曙であるチャド少年が経験したローカルな文化状況を理解するためには、活字メディアである新聞や雑誌、視覚メディアの映画、放送メディアとしてのラジオ、テレビなどが相互に作用し合うメディア環境の把握が不可欠であろう。したがって本稿では、一九七五年から一九九五年までの雑誌『Kokiku』とローカルな日本語テレビ文化との関係に着目し、ハワイの日本語放送文化史構築に向けた考察を試みたい。

管見の限り、『Kokiku』を参照した先行研究は見当た

らないが、毎月の番組表や日系テレビ局関連のニュースが掲載された同誌は記録性に富み、ハワイの日本語テレビ放送の実態を把握する上で、極めて重要な資料である。<sup>(10)</sup>

## II 『Kokiku』の時代

### (一) 「ハワイの皆さま」に寄り添ったテレビ雑誌

一九七五年一〇月、テレビ雑誌『Kokiku』<sup>(11)</sup>がホノルルの藤井・鈴木夫妻によって創刊された。B五版のカラー表紙で全三四頁。頁末には、ホノルルの百貨店・白木屋など日系商店の広告が並んだ。一冊一・五ドル(年間購読料一五ドル)の月刊雑誌は、創刊当時、編集作業はもちろん、印刷所との取引、書店への配達、契約購読者への郵送までのすべてを夫妻二人でまかっていたという。鈴木編集長の名で書かれた発刊の辞には、「ハワイの人々」の「心の友」になりたいという志が表明されている。

『こぎく』はハワイの皆さまの雑誌です。

ちょうど水前寺清子が巾広い年齢層のファンを持つように、家族全員のための雑誌として誕生しました。

キク・テレビ番組が中心ではありませんが、ハワイ社会のできごとや、さまざまな人の声もとり入れた独自の、ローカル色の濃い、われらのマガジンとして発展させて行きたいと望んでおります。

どうか『こぎく』が、ハワイの人々の心の友として健やかに育つてくれますよう、皆さまのご指導と御協力を心からお願い致します<sup>(12)</sup>

日本語に親しむ一世にも、英語を母語とする二世以降の世代にも、また他のエスニック・グループの人々にも親んでもらいたい。日系社会の人々に向けて、ではなく、多様な「ハワイの皆さま」を意識した雑誌づくりは、すべての記事を日英両ヶ国語表記とし、こ

ども番組から歌謡界のスター、時代劇に至るまでの幅広い特集を組んだり、地域的话题を豊富に取り入れたりする工夫が図られた。後述するように、当時ハワイでは、テレビ朝日から番組提供を受けたKIKUのみが夕方六時から一時までの一約五時間、地上波で日本語番組を放送しており、『Kokiku』はKIKUの付属雑誌の性格を帯びていた。



【図一】『Kokiku』創刊号の表紙および番組表

創刊号に掲載されたKIKU総支配人ジョン二宮の祝辞には、「今後、この雑誌を通して局とハワイの皆さまとの結びつきが益々深いものとなりますように」とある。<sup>(13)</sup> 同号の「ロスアンジェルスだより」では、老舗日本語新聞『羅府新報』記者の笠間茂が、「テレビ・メート雑誌」あるいは「テレビ・ファン雑誌」といった「活字媒体」は、「日語版テレビ」という「電波媒体」とその視聴者を結ぶ上で極めて重要なメディアであると指摘している。<sup>(14)</sup> 雑誌という活字メディアは、テレビという電波メディアの送り手と受け手を、具体的にはどのように「密接」にするのだろうか。『Kokiku』をもとに、第三章で考察したい。以下ではまず、『Kokiku』が読まれていた背景を理解するために、一九六七年のKIKU開局から一九九〇年代までのハワイの日本語テレビ放送の概要と、ハワイ社会における日系人・日本人の構成について押さえよう。

## (二) 待望の日本語専門テレビ局KIKUの誕生

一九六七年にホノルルで放送を開始した日本語専門テレビ局KIKUは、ハワイ生まれの帰米二世・フーヴァー立石らの尽力と、日本語テレビ放送を渴望する日系コミュニティの需要によって誕生したといわれている。<sup>45)</sup> KIKU開局以前、すでに一九二九年には、ハワイのラジオ局から日本語番組が放送されていた。戦時期の中断を経て、一九五〇年代には、KQMB-TVやKONA-TV、KULA-TVといったホノルルのテレビ局を通じ、一週間に二時間程度の日本語テレビ番組が放送されていた。その背景には、ハワイ社会における日系コミュニティの勢力の拡大がある。一九六〇年の全米人口調査では、ホノルル市近郊の人口約三五万のうち、日系人「Japanese」が一二万人を占め、一〇万の「White」や二万の「Chinese」を圧倒していた。当時の日系コミュニティはハワイ最大のエスニック・グループだったのである。

人口だけではない。日系はハワイの政財界の上層部

に進出し、一九五四年に日本航空の太平洋線一番機がホノルルに到着して以降、日本人渡航者は年々増加していった。一九六〇年には、日系人資本によるラジオ局KHOPが初の終日日本語放送を始め、六二年にはKHOPも加わった。

やがて家庭にテレビが普及し始めると、より長時間の日本語テレビ放送が渴望されるようになっていった。KHOPで総支配人を務めていたフーヴァー立石は、一九六六年、リチャード・イートンが所有するホノルルの放送局KIKU-TVから日本語放送を試みた上で、日本語専門放送局KIKUを立ち上げ、連邦通信委員会(Federal Communications Commission)に開局許可を申し出た。FCOは当初、外国語放送が国家の分裂や分断化を招く危険性や、英語リテラシーの高いホノルルの日系コミュニティに日本語放送は不要、といった理由でKIKU開局を認めなかった。しかし、全米で人種差別撤廃運動が盛り上がりつつあった社会状況のなか、「民族」や「言語」の多様性を求める国内世論が追い風となり、翌六

七年にKIKU開局が承認されたのである。FCCとの聴聞会記録を詳細に分析した魚住(一九九八年)によれば、英語リテラシーの有無にかかわらず、ホノルルの一定数の住民に日本語テレビ放送の需要があると審議会で認められたことが、最終的な開局許可につながったという。<sup>(16)</sup>

かくしてKIKUは、テレビ朝日から提供された番組に自社制作番組を加え、一九六七年一月三日に初放映を実現した。<sup>(17)</sup> 局名であるKIKUは、「菊薫る天長節の佳日を期して初放映を行なったところ」に由来するという。ハワイの日系芸能史をまとめたジャック田坂は、当時の様子を次のように描写している。

放送開始当時は設備も不十分で視聴取状態も不良。映像が途切れて音ばかりなので、見るテレビではなく「聞くテレビ」などの弥次も飛んだ。しかし、海外では初めての日本語テレビ局として発足したKIKUは、毎晩ゴールデン・アワーに娯楽番

組を放映し、次第に日系社会に定着して、次々と思い出に残る好番組も増え、KIKUの大河ドラマや紅白歌合戦などが、ハワイでも見られるようになった。<sup>(18)</sup>

英語字幕をつけたKIKUの番組は日系コミュニティ内外の幅広い世代に絶大な支持を得たが、なかでも熱心に視聴していたのは、戦前に渡布した日系一世や日本語が話せる二世、つまり日系コミュニティの「お年寄り」だったという。<sup>(19)</sup> ゴールデンタイムには、日本から輸入した音楽番組や現代ドラマ、時代劇が放映された。『Kokiku』によれば、大相撲の中継も人気番組だったようである。<sup>(20)</sup> KIKUのスタッフとして放映に携わっていた『Kokiku』の藤井日出男(画夢)は、「日系社会のお年寄りたちはベッドに正座して涙を流しながら見ていた」と当時を振り返っている。

〔図〕一画：藤井画夢『Kokiku』

一九八五年七月号、三三三頁



彼らにとつては、日本の番組を「見る」だけでなく、日本語や日本の歌を「聞く」喜びも大きかっただろう。

KKK 開局から八年後の一九七五年に『Kokiku』は創刊された。一九八〇年九月号の読者欄には、「吾々老境組は、こうした『KIKU』放映や『Kokiku』刊行という」御奉仕により、余生を楽しむことができると思うと本当に明治者としては満腔の感謝を捧げなければならないと存じます。どうぞ吾々の意をくみとられ、喜ばせて下さい」という、明治生まれの日系一世、ハワイ島在住読者からの手紙が紹介されている。<sup>(2)</sup>編集長の鈴木は、同誌が高齢の一世に読まれ愛されたことを、「一世に聞

に合つて本当に良かった」と回顧している。<sup>(2)</sup>創刊十二周年号には、過労で何度も倒れながらも、鈴木が休刊なく『Kokiku』を続けてこられたのは、苦労を重ねた日系一世への思いがあつたと記されていた。

頭だけでなくうんと身体も動かして、一世の苦勞に近づきたい、そんな思いで働いていました。懐かしい、十二年前です。<sup>(3)</sup>

『Kokiku』とともにハワイの人々に親しまれたKIKUであつたが、広告収入だけに頼るテレビ局の経営は振るわず、田高による番組購入料の高騰も相まって、一九八一年、ついに外部資本に買収されてしまう。局の改編に伴い、日本語放送枠も大幅に縮小された。しかも真昼や深夜などに割り当てられたため、KIKUのファンは、一家団欒のゴールデンタイムに日本語番組は望めない状況に陥っていた。

### (三) ケーブルテレビ番組提供局NBNの台頭

一九八一年、このような状況を憂いたハワイ大学の研究者たちが発起人となり、日米合同資本（アメリカ五二%、日本四九%）でケーブルを利用した番組供給局Nippon Golden Network (NGN) が設立された。中心となったのは、日系二世、三世の研究で著名であったハワイ大学マノア校、アメリカン・スタディーズの Dennis M. Ogawa (一九四二-) である。Ogawa 教授の求めに、「マス・メディアからコミュニケーション・メディアへの移行」を予見していたコミュニケーション研究の泰斗 Wilbur Schramm (一九〇七—一九八七) やテレビ研究の Jack Lyle (一九二九—一九八九) らが応じ、資金提供をおこなった。なかでも学習院大学教授でハワイ大学東西研究所主任研究員の加藤秀俊 (一九三〇—) は、番組提供会社としてのテレビ東京や、株主としての西武グループ、電通などの仲介に奔走した。日本中世文学研究者で翻訳家・ジャズ奏者としても著名な James T. Araki (一九二六—一九九二) は、英語字

幕作成を担当している。「ゴールデンタイムの日本語テレビ放送を守りたい」という Ogawa 教授の篤志と彼のソーシャル・ネットワークが、NGN 創設を実現させたといえるだろう。NGN の代表取締役社長にも Ogawa 教授が就任した。NGN はハワイで最も多くの契約者をもつケーブル会社オーシヤニック・エヌと提携し、視聴料金は毎月一一・九五ドル（ケーブル設置料四〇ドルの他、毎月の基本料金九・九五ドルも必要）に設定された。当時のホノルルでは、オーシヤニックに契約すれば、三大ネットワークや公共放送、KOME などの地上波放送も含めて、合計三二チャンネルの視聴が可能であった。一九八二年一月一日より、毎晩六時から十時までの日本語番組を放映した NGN は、「戻ってきた!! プライム・タイムの日本語テレビ番組」と歓迎された。翌年には映像コンテンツ貿易の中央映画貿易株式会社が NGN グループに加わり、NGN 東京支局として番組の買い付けから輸送までの業務を請け負うようになったことも手伝い、NGN 朝の連続テレビ小説や東映映画などの

放映も実現している。良質な英語字幕と、バラエティに富む番組編成が好評を博し、*NBC* は着実に視聴者を拡大していった。四〇〇〇～五五〇〇世帯でスタートした契約世帯数は、二年後の一九八三年末には当初の目標であった六〇〇〇世帯を上回る七九二六世帯を達成している<sup>(27)</sup>。八五年には、*NBC* ニュースの「同日放送」を行い、その画期性が脚光を浴びた。一九時間の時差を利用した「同日放送」のからくりはこうである。まず、成田空港での*NBC* ニュースをビデオテープに録画し、日本航空の最終便で空輸する。早朝のホノルル空港で待ち構えていた職員がテープを受け取り、バイクで*NBC* スタジオまで運び、朝のニュースとして放映した。実に綱渡りのプロセスである。やがて九〇年代に衛星放送が普及すると、テレビ番組がモノとして輸出入される時代は幕を閉じた。

*NBC* の成功や、ハワイへの日本人観光客および日本企業の増加を受け、一九八二年以降には地上波で *KNLN*、*KSHO*、*KHAI*、ケーブルで *JN*、*プロ*、*FNI* (フジテレビ)

などの日本語専門チャンネルが続出した<sup>(28)</sup>。七〇年代後半から八〇年代にかけては、日系アメリカ人として初めての州知事 George・R・Ariyoshi が活躍したり、日本の芸能人にハワイで年末年始を過ごす慣習が広まったりと、ハワイ社会における日系コミュニティの存在感は益々増大していた。『*Kokiku*』の時代はハワイの日本語テレビ黄金期と重なっていたといえよう。テレビ人気は映画館文化の衰退を招くほどであった<sup>(29)</sup>。

〈図三〉一九八五年一月号『*Kokiku*』掲載の番組表

…五チャンネル

しかし、NNNを除くテレビ局は、経営の失敗により、開局からわずか数年で撤退に追い込まれている。一九八九年当時、ハワイ州の人口に占める日系人の割合は二二％で、日系コミュニティの内部では、二五歳から五四歳までの三世が四五％もの割合を占めていた。NNNは入念な市場調査により、日系コミュニティの三〇％を占める五五歳から八四歳までの二世をメイン・オーディエンスに設定していたという。NNNが有料チャンネルであることを考えれば、対象年齢層を高く設定するのは合理的であろう。NNNの視聴者は地上波に比べて日系コミュニティ色が強くなった。

一九八〇年代後半から日本語テレビの開局が相次ぐなか、一九九三年にKHAとJNプロが提携し、地上波のKIKUが新たに開局された。これは、かつてのKIKUとは全くの別会社である。ちょうどその頃、『Kokiku』も一九九五年の藤井の他界を契機として、九七年には鈴木も引退、同誌はやがてハワイ報知社に売却された。以後、二〇一五年現在に至るまで、ハワイの日本語テ

レビ放送は、地上波のKIKUと、ケーブルのNNNの二局に限られる。



〈図四〉一九九三年四月号『Kokiku』掲載の番組表  
 …… KIKUとNNNの二局になっている。

### 三 テレビと視聴者を結ぶ『Kokiku』

前章では、『Kokiku』の時代背景を概観してきた。日本語を第一言語とする一世、二世から、英語を母語とするハワイ生まれの三世、四世へと世代交代が進むなか、ハワイの日本語テレビは常に新しい視聴者を獲得してきた。そこに、テレビ雑誌はどのような機能を果たしたのだろうか。本章では、ハワイにおける日本語テレビ文化圏の形成、つまりテレビと視聴者とを接続するという観点から、雑誌『Kokiku』の効果について、以下三つの要素から検討する。なお、『Kokiku』の発行部数は年々増大していったことが編集者欄で綴られており、ピーク時には五〇〇〇部弱を記録した。<sup>(31)</sup>

#### (一) 番組情報の提供 <Informative>

第一に、『Kokiku』に掲載されたテレビ番組表は、読者(視聴者)にとって極めて情報価値が高いものであっただろう。当然のことながら、当時はインターネッ

トの検索サイトなど存在しない。番組表は当地の主流英字新聞で紹介されることがあっても、小さなフォントでタイトルのみが掲載されているに過ぎなかったり、英語表記のみであったりして、リテラシーのない一世、二世には実用的ではなかった。『Kokiku』読者は、自分なじみのある言語で番組情報を概観し吟味しながら、自分の観たい日本語番組を探す楽しみも経験できたのである。

次に、放送予定や放送中の連続ドラマの「あらすじ」といった番組情報が、テレビを「読む」ことを可能にしたという点についても指摘したい。<sup>(32)</sup> 読者が、なんらかの事情で観逃した連続番組の内容を『Kokiku』でフォローすれば、番組視聴者の「脱落」を防ぎ、新たな「参入」をも促す効果につながる。さらに、オアフ島以外の島々では、多数の火山を抱える地理的な事情により、各地上波放送局の電波が不安定になる事態も珍しくなかった。そうした島々の視聴者にとって雑誌でテレビを「読む」ことは貴重な娯楽であり、異なる島々

に居住する読者（視聴者）と番組情報を共有する喜びにもつながっていたといえよう。

また、『Kokoro』はグラビア写真を多用し、テレビのスターを積極的に紹介していった。テレビの広告媒体でもある『Kokoro』は、テレビ局や映画配給会社から、比較的安価にスターの写真を入手することができた。

一九七〇年代から八〇年代の『Kokoro』には、時代劇の人気スターであった松平健や千葉真一、松坂慶子、歌手の山口百恵やアグネス・チャンなどが頻繁に登場している。ハワイの視聴者にとって、日本で発刊されている月刊『明星』（集英社）などの芸能雑誌は言語や価格の問題で敷居が高かったため、日系の書店でいつでも購入でき定期講読も可能な『Kokoro』は貴重な芸能情報誌だったのである。

番組情報の提供は、日本語テレビ文化圏の形成や維持にとって、「視聴者をキープする」即時報酬として機能したと考えられる。

## （二）読者の交流と参加（communicative）

次に、雑誌をめぐる読者のコミュニケーションに着目する。『Kokoro』誌面の特徴を捉えるために、一九七六年一月号の読者欄（二六頁）を見てみよう。この号では日本語表記、英語表記の読者投書が同一頁に掲載されており、読者像を知る手がかりとなる。ここでは、以下二つの投書を紹介しよう。

藤井日出男様

鈴木瑞枝様

雑誌コギクを毎月発行して頂きまして本当に有難うございます。テレビをたのしむ私共老人は、すべてがくわしい写真入りでおかき下さいますので、どんなにかよく分り、内容もはつきりして有難く、楽しく過されるか分かりません。更めて御礼申し上げます。

私は発刊以来毎月四冊、人様にもあげますので博文堂「在ホノルル日本語書店」で買って参りま

す。こゝ発展を祈ります。」<sup>1</sup>

原文が日本語であることから、投稿者は日系二世あるいは三世であろう。日本語テレビの情報誌として『Kokiku』を愛読するのみならず、知人への毎月の贈り物として同誌を購入しているという。『Kokiku』誌面を概観すれば、投稿者のように「人にプレゼントする」読者は少なくなかったようである。<sup>(33)</sup> 娯楽雑誌としての『Kokiku』は、親しい人とのコミュニケーション・ツールの一つでもあった。

Dear KOKIKU,

Sai jo Hideki [西城秀樹] is one of my favorite singers. Could you please write about him in your next issue. I will really appreciate it.

Thank you.

Adeline

この英文投書は、『Kokiku』読者欄における頻出投書

の典型の一つ、一ファンとしてスターの情報提供を求める形式である。『Kokiku』は読者の質問や要望に応える形で、映画やテレビ、歌謡界スターのインタビュー特集を組んだり、ファン・レターの送り先を紹介したりした。<sup>(34)</sup> さらに、番組やスターの人気投票を行い、その結果を読者にフィード・バックしている。<sup>(35)</sup> スターに直接手紙を書いたり、好きな番組を投票したりといった『Kokiku』を通じたコミュニケーションは、テレビ文化に対する読者（視聴者）の主体的な参加を促したといえる。

参加感覚に関連して、雑誌がテレビ視聴者間の同胞意識を形成した可能性も指摘できる。発刊の辞で「われらのマガジン」を自負し「ハワイの人々」の「心の友」でありたいと言言した鈴木編集長のエッセイには、読者つまりテレビ視聴者の「同胞」意識を示す表現が度々出てくる。例えば、一九七六年一月号（十七頁）には、「ユギクの年間購読者の各島分布」が示された上で、次のように綴られていた。



ケーブルのあるハワイ島以外の他島では地域的にキクがよく入るらしいです。静かなモロカイなどで同時にキクの番組をみている同胞があると思ふと親近感がグット湧きます。

〔図五〕 ハワイ諸島略図  
 出典：『山中速人』『ハワイ』

岩波書店

——コギクの年間購読者は、  
 オアフ島全域、ハワイ島、  
 カウアイ島、マウイ島、  
 モロカイ島、ラナイ島な  
 どに分布していた

ただ単にテレビを見るだけでは、視聴者は必ずしも「同胞」と「同時に」同じものを見ているという想像力を働かせたり、そうした「同胞」に「親近感」を抱いたりするとは限らない<sup>(36)</sup>。同じものを見ている仲間がいる、という感覚は活字の表現によって強化されるのかもしれない。鈴木は、「ハワイの皆さま」へ向けたメッセージを送り続けた。一九八六年には、日本への一時滞在から帰布したときの感想を以下のように表している。

日本はやっぱりすばらしい。日進月歩の国であり、人人のあの、がむしゃらな行動力は凄まじい。でも、ハワイは文句なしに、もつといい。

この暖かい太陽、澄んだ空気と水、かぐわしい花。

どこかへ旅行して帰る度に、「ハワイはいいなあ」と改めてこのサンゴ礁の島に惚れなおす私です<sup>(37)</sup>。生まれ育った日本を離れ、ハワイに生きる鈴木木の率

直な実感は、そのまま「ハワイの人々」への励ましになつていたことだろう。多様な読者を排除することなく、『Kokiku』は日系読者の共同体意識を強めていたと考えられる。このように、編集者を介した日系読者の共同体意識もまた、ハワイの日本語テレビ文化圏を支える背景になつていたのではないだろうか。

### (三) 日本語・日本文化の教材 <educative>

最後に、日英両ヶ国語表記の『Kokiku』が、主に日本語の学習教材になつていた点に着眼する。そもそも英語字幕の付いた日本語テレビ番組自体、耳で聴いて目で読む語学学習メディアとして活用されていた。ハワイの公立学校の日本語クラスや大学図書館が『Kokiku』を定期講読していたことは、日本語テレビ視聴の推奨という点だけでなく、同誌に日本語聴取の補助教材や、読み書き学習教材としての価値が認められていたことの証左であろう。『Kokiku』は、誌面に三世や四世の作文を掲載して講評したり、読者に、フ

アン・レターを通じた日本語学習を促したりしていた。<sup>(39)</sup>

スターへのてがみはコギクにのせてから日本のスターまでお送りします。

みなさん、なるべく日本でかいてくださいね。そのほうが心がつうじますから。

コギクあてにファン・レターをお送り下さい。<sup>(40)</sup>

日本語に加えて、『Kokiku』は「東京だより」コーナーなどを通じ、日本あるいは東京の文化を伝え続けた。ハワイで放映されている日本のドラマの解説記事(大名とは?)一九八四年二月号、五頁。「還暦とは?」一九八七年十二月号、三四頁)や、人気の高い俳優や歌手のインタビュー(「昨今の杉良太郎」一九七七年七月号、一六頁。「特別インタビュー布施明」一九八二年一月号、八頁)、なかには最先端の芸能情報(「話題の新人岩崎宏美」一九七六年二月号、三三頁。「有力な新人松田聖子」一九八一年一月号、三〇頁。「日本の新番組

『大岡越前』ハワイにもくるか?」一九八二年五月号、三九頁も見られた。日本国際観光協会提供の写真付きで、「サツポロ雪まつり」や「平安神宮の初詣」など「日本の旅」を紹介する記事(一九八〇年一月号、二四頁)も散見される。読者が同時代の日本文化に親しむことは、日本語テレビ視聴者の新規開拓にもつながっていたと考えられる。



〔図六〕一九八二年六月号の表紙 アニメ



〔図七〕一九九一年八月号の表紙 現代ドラマ

言語教育や文化の発信には、日本語テレビ文化圏にとって、将来的な日本語テレビ愛好家を育む遅延報酬を期待できるだろう。活字メディア『Kokiku』が果たした役割について、鈴木は一九九四年にこう述べていた。

二十八年前「一九六六年」、ハワイにきた時誰もが「もう二十年たてば日本語は全くなくなるよ」と言っていました。

そしていま、その当時より遥かに、遥かに日本語はさかんになっています。

これは日本企業の進出や観光客の増加で、就職に必要なことも要因の一つです。

でも、それよりも日本語テレビがハワイの家庭に入りこんだという事実が最大の仕掛け人です。

テレビドラマに英語の字幕をつけたので他人種も喜んで見えています。

そして、そのテレビの偉業を日英両語の活字として支えたコギクの役割も非常に大きいものがあると、いまこそ確信できます。<sup>(41)</sup>

以上、三つの要素に分けて考察してきたが、取り扱った誌面の例には、それぞれの要素が複合しているものも多い。テレビ雑誌『Koki』は、「情報提供」の即時報酬と「日本語・日本文化教育」の遅延報酬によって、また雑誌が形成する読者共同体によって、狭義の日系コミュニティに留まらない、ハワイのローカルな

日本語テレビ文化圏を支えてきたのである。

#### 四 ローカル誌とエスニック・テレビが生み出すメディア文化

テレビ雑誌『Koki』は、経年変化に伴って読者を細分化するのではなく、多様な人々を包摂した特色ある雑誌メディアである。『Koki』の読者層の広さは、同誌の懸賞に一二歳の子どもから八八歳のお年寄りまでが応募していたことから推察できる。<sup>(42)</sup> テレビの持つ大衆的性格が雑誌読者の多様性に反映されているといえるだろう。

本稿では、ハワイの日本語テレビ文化圏に与えた影響という観点から雑誌『Koki』の特徴を概説してきたが、実証的考察については今後の課題として残されている。ハワイの日本語放送メディア史に『Koki』を位置づけることで、雑誌という活字メディアの機能について、議論を深めていきたい。

藤井・鈴木夫妻が『Kokiku』を刊行していた一九七五年から一九九五年までのメディア社会は、雑誌やテレビにとつて幸福な時代だったのかもしれない。ケーブルによる多チャンネル化、インターネットによるオーデイエンスの細分化が進展すると、かつてのように雑誌の読者共同体や地域に根ざしたテレビ文化を、それまでと同様には想定しづらくなつていった。一方で、衛星放送やインターネットなどのニュー・メディアで移民が母国と密接であり続けることによる「遠隔地ナシヨナリズム」論や、エスニック・メディアに文化発信の機能を期待する「ソフト・パワー」論が新たなテーマとして俎上にあがっている<sup>(4)</sup>。

ただし、日本発の番組とハワイの視聴者の間を『Kokiku』というローカルな雑誌メディアが媒介していたように、あるメディアの効果や機能は、他のメディアとの相互作用によつて初めて意味を持つ。現代のハワイにおける日本語テレビ文化を論じる場合、それまで雑誌が担っていた機能が他メディアにどのように

代替、応用されていったのか、それはエスニック・コミュニティや地域文化全体にどのような変容をもたらしたのかについて検討することが必要であろう。現代そして未来を読み解く文法を得るためにも、雑誌からテレビをみる歴史研究の有効性を、改めて指摘しておきたい。

#### 〈謝辞〉

本稿は、二〇一三年度松下幸之助記念財団研究助成、「平成二五年度高橋信三記念放送文化振興基金研究助成」、「二〇一四年度東京経済大学個人研究助成」の成果の一部である。ホノルルでの調査は、社会学者・加藤秀俊博士と、NENの社長でありハワイ大学マノア校教授のDennis M. Ogawa博士の多大なる協力によつて実現した。記して御礼を申し上げます。

(1) 曙太郎『横綱』新潮社、二〇一二年、五八頁。

- (2) 藤井日出男は、大連出身、日本では京都新聞、東京新聞の記者などを経験した戦後の一世。来布後は、ハワイ・タイムズ美術部を経て、KINI テレビのアートディレクターを務めた。鈴木端枝は、神戸育ち。米国の貿易会社や南米の領事館勤務を経て、毎日新聞記者を経験。藤井と同様(戦後の日本でもある。来布後は)、ハワイ・タイムズ記者、ワニキキ・ビーチプレス日本語版編集長を務めた。『Kokila』一九七五年十二月号、二〇頁。
- (3) 田丸忠雄『ハワイに報道の自由はなかった：戦時下の邦字新聞を編集して』(毎日新聞社、一九七八年)、坪井みゆ子『ハワイ最初の日本語新聞を発行した男』(朝日新聞出版、二〇〇〇年)、田村紀雄『海外の日本語メディア』(世界思想社、二〇〇八年)などがある。
- (4) 比喜武信『新聞にみるハワイの沖縄人九〇年』(戦前編・戦後編)『比喜武信、一九九〇年・九九四年)、沖田行司『ハワイ日系移民の教育史』(シネルヴァ書房、一九九七年)
- (5) ジャック・・田坂『ハワイ文化芸能一〇〇年史』(イースト・ウエスト・ジャーナル、一九八五年)、権藤千恵『ハワイ日米キネマにみる戦後ホノルルの日本映画上映』『アウト・リーチ』第四卷(立命館大学、二〇〇四年)
- (6) 魚住真司『米国日本語テレビの誕生経緯とその変遷』ホノルルKIKI-TVの二〇〇年『同志社アメリカ研究』第三四号(同志社大学アメリカ研究所一九八八年)、Jack Lyle, Dennis Ogawa and D. Thomas, Japanese Programs in the United States: A Widening Window on Another Culture. *A Bulletin of the Institute for Communications Research, Keio University, 1986.*
- (7) 田中則広・沈成愷『グローバル化時代の日本語放送 ニューヨーク・ハワイの現地調査より』『放送メディア研究』第六号(日本放送協会放送文化研究所、二〇〇九年)、田中則広『文化発信メディアとしての可能性』『ハワイ・アジア系(日本・韓国・中国)テレビチャンネルの事例より』『放

送研究と調査』第五九巻第七号(日本放送出版協会、二〇〇九年)

- (8) 山中速人『ハワイ』岩波書店、一九九三年。Ogawa, Dennis M. *Jan Ken Po: The World of Hawaii's Japanese Americans*. University of Hawaii Press: Honolulu, 1978. Okamura, Jonathan Y. *From Race to Ethnicity: Interpreting Japanese American Experiences in Hawaii*. University of Hawaii Press: Honolulu, 2014.
- (9) 白水繁彦『多文化状況とエスニック・メディアの送り手』：ハワイの日系エスニック英語新聞『Hawaii Herald』をめぐって』『武蔵大学総合研究所要覧』(武蔵大学、二〇〇一年)、白水繁彦『メディアとローカル化』『ハワイの 코리아 語メディアと主流メディアの事例から』『ジャーナル・オブ・グローバルスタディーズ』(駒沢大学、二〇一〇年)。
- (10) ハワイ大学マノア校の Hamilton Library で閲覧可能。また、インターネット上では、『Kokila』ファンが、収集したコレクションを公開するプログラムも見られる。一例として、zdrorana My KOKI!U Collections <http://zdroranaagain.blogspot.jp/2011/03/my-kokila-collection.html> (投稿日：二〇一一年二月三日、最終閲覧日：二〇一五年十一月二〇日)
- (11) 雑誌のなかで日本語では『Kokila』/『コギク』と表記されるが、本稿では英文表記の『Kokila』を統一的に使用する。
- (12) 鈴木は、筆者のインタビュー(二〇一四年九月六日、於：ホノルル市 KXO オフィス)にちなみ、『Kokila』創刊は、来布以来の悲願であったこと次のように語っている。私は一九六六年にハワイに来てからもうずいとなが、ハワイの人のために何かを私にさせてくださいと、毎日教会でお祈りしていた。ずいとながら来たはずかりのとき、もうね、めちやめちや良くしてもらったから。ハワイの人は、ほんとうに良くしてくれた。優しいのね。だから、ハワイの人のために、っていうのが絶対だったの。』
- (13) ジョアン・二宮『コギクの創刊をお祝いします』『Kokila』一九七五年

十月号、五頁。

(14) 等閑茂「ロスの茶の間より『Kokaid』一九七五年十月号、二二頁

(15) KIN-TE「閉局までの経緯については、前掲の魚住（一九九八年）に大幅に依拠した。

(16) 魚住、前掲、八七頁。

(17) 自主制作番組には、英会話講座、漢字の話、市民講座、クイズ番組（子どものためのマンガ学校「マイナ太字」(藤井画夢が担当) などがあった。制作費をおさえた番組ばかりだったが、視聴者には好評だったという。(藤井画夢「ハワイの日本語テレビ局変遷」『Kokaid』一九八五年七月号、三三頁)

(18) 田坂、前掲書、一三三頁。紅白歌合戦は当初、録画ビデオによる放映であったが、一九八二年の大晦日より、KINTEがハワイ史上初めて衛星中継による同日放送（ハワイ時間十二月二日夜九時から二時）を開始した。

(19) 『Kokaid』では、非日系の読者・テレビ視聴者の存在が度々紹介されている。一九七六年十一月号「こんな人も見ている」(KINTE日本語アレブのファンに変わりだねが多いが、なかでもフランス人は種的にふるつている) (二四頁)、一九七七年七月号「日本の俳優や歌手の紹介も視聴者のよき手引きとなり小生なども彼らの経歴その他に精進するようにになりました。ビル・マティングレイ」(二七頁)。KINTE時代にも、一九八四年九月号「コギクの読者はハワイの日系社会の『福凶』である」ことを、長く続けられ続けるほど痛感いたします。／つまり、日系のアメリカ各世代、また配偶者や友人が日系である他人種の人々更にメインランド、グアム、カナダ、日本と、ぐんぐんその輪は広がります」(四一頁)、一九九二年六月号「人種のつばはハワイが日本語アレブファンにも反映」(三三頁)。

(20) 『Kokaid』一九八一年一月号、一九頁。  
(21) 『Kokaid』一九八〇年九月号、三四頁。

(22) 二〇一四年九月六日の聞き取り(於：ホノルル市KINTEオフィス)による。

(23) 鈴木瑞枝『KINTE』一九八七年十月号、四一頁。

(24) テレビ東京の取締役・番組販売社長としてKINTE創設にかかわった深谷憲一は、KINTEプロジェクトへの協力の動機について、次のように回想している。「西友ストアは、ハワイに自社をはじめ西武百貨店、西武鉄壱等西武グループの進出もあつて関心が強かったわけであるが、堤隆博「社長は、『ゴールデンタイムに日本語放送がなくなつて日系家庭が困つているのに黙っているわけにもいきまい。採算は第一として文化的事業としての意義は大きい」として、積極的に促進することになり、同社の外国部が相当の力を入れて事務局を引き受け、著作権団体との交渉や、番組の輸送を受け持つ中央映画貿易社の選定、さらに当該放送会社の東京支社設置まで中心となつて推進してきている。また、テレビ東京の中川「順」社長は、五六年初頭の経営方針の一つとして、国際化路線に推進を挙げており、可能な限り協力していくことになった」。深谷憲一「番組供給会社としてスタートしたKINTE(ニッポン・ゴールデン・ネットワーク)、『月刊放送ジャーナル』第二巻第五号、一九八二年、三三頁。

(25) 深谷、前掲、三三頁。  
(26) 『East West Journal』一九八一年十二月一日号、五頁。  
(27) KINTE契約者は、エリア内のケーブル加入の日系家庭の約四割を占めた。深谷、前掲、三三頁。  
(28) 『Kokaid』一九八五年二月号、七頁。  
(29) ハワイへの観光客数は一九七一年に二〇〇万人を突破。軍事、砂糖、バナナ、プルなどの産業を抜いて観光がハワイの第一産業となった。七六年には二〇〇万人、八一年に四〇〇万人、八六年に五〇〇万人と加速度的に増加。日本人観光客の数も一九八〇年代に急増し、一九九〇年には年間約七〇〇万人のうち約二〇〇万人が日本からの観光客となり、ハワイ州

にとつて日本市場の重要性はきわめて大きいものとなつていった。ハワイ州観光局「日本人の海外旅行時代の幕開けと「憧れのハワイ」」  
<http://www.travelvision.co.jp/hawaii/2009/anniversary/504.html> (最終閲覧日：二〇一五年一月二〇日)

(30) 田坂 前掲書、一四頁。

(31) 『Kokiku』の編集によりには、発行部数の増加が度々綴られていく。「毎月、着実なペースで数を増すコギクの読者、なんだかお友達が増えてゆくような気がします。『Kokiku』一九八〇年一月号、二五頁。この一年にびつくりする程、読者の数がふえました。『Kokiku』一九八四年九月号、四頁。

(32) 『Kokiku』のテレビ番組情報は「見どころ」などを紹介するに留まり、作品を吟味する批評とは質的に異なっている。

(33) 『Mother's Day & Father's Day Gift 他島 米本土へも送ります。』『Kokiku』一九八二年五月号、三八頁。「大人気のコギクのクリスマス・ギフト講義 娘から父母へ、友人、知人へ、一年中喜ばれるギフトとなります。』『Kokiku』一九八五年十一月号、一八頁。

(34) 一方で、「スターの泊まっているホテルを教えて」という読者からの電話での問い合わせには「コギクでは彼等のプライバシーを守るために決して言わない方針です。ご了承下さい。」と応じていた。『Kokiku』一九八三年一月号、四二頁。

(35) 「人気番組、人気歌手、人気スターの読者のベストテン」(一九七九年六月号、一一頁、「日語テレビ番組とスターの人気投票」あなたの好きな番組スターとは?) (一九八五年十月号、一九頁)。

(36) 実際の放送には、ホノルルと、他の島とでは時差が生じていた。『Kokiku』一九八三年十一月号(四・三四頁)によれば、ホノルルとハワイ島、マウイ島との放映時間の時差は、ETIで二週間、NZTで二週間もあった。

(37) 『Kokiku』一九八六年十一月号、四頁。

(38) テレビで日本語の勉強『Kokiku』一九八四年一月号、二九頁。

(39) 「たのしいよふん」『Kokiku』一九七六年五月号、二六頁。

(40) 『Kokiku』一九七五年十月号、一七頁。

(41) 『Kokiku』一九九四年十月号、四頁。

(42) 『Kokiku』一九八二年三月号、四頁。

(43) 田中則広「文化発信メディアとしての可能性―ハワイ・アジア系(日本・韓国・中国)テレビチャンネルの事例より」『放送研究と調査』第五九巻第七号(日本放送出版協会(二〇〇九年))。